

天文学とプラネタリウム

第65回



今月のお題

南の島の日食体験記



幸運にも天候に恵まれた沖縄での日食観察。薄雲越しに見える欠けた太陽に感動されました。



www.tenpla.net

高梨直雄 (国立天文台 光赤外研究部 研究員)

平松正顕 (台湾 国立清華大学)

皆既日食レポート in 沖縄

薄暗い青空、下がる気温、涼しい風。確かに大きく欠けていることを実感させる一方で、わずかに残り7%だけでなおあれだけの明るさを与えてくれる太陽は本当に偉大だ。沖縄・水納島(みんなじま)で最大食分0.93の部分日食を見た感想をまとめると、こんな感じになりました。

先日の日食、皆さんはどのようにご覧になりましたか? あいにくのお天気のところも多かったようですが、雲間から、あるいはインターネットやテレビの中継で、欠けた太陽の姿を楽しまれた方も多くいらっしゃると思います。先月号のこのコラムでも取り上げたように、この日食に対する世の中の反応は私たちの想像をはるかに超えていました。日食観察グラスはどこも売り切れ、太陽撮影に適したNDフィルターも入手困難、科学館だけでなく全国展開のスーパーまでもが参入した日食中継。「世界天文年」「日本で46年ぶり」といったキーワードも多く聞かれ、その盛り上がりには驚かされました。

筆者平松が日食を見た水納島でも、予想以上に多くの人が日食グラスを持っていたようでした。住民約40人の島のビーチにはその10倍くらいの観光客がいたのですが、日食時間帯に沖縄本島から船でやってきた人の中には港に着くなり太陽を指差し見上げる人、ビーチグッズレンタル屋のお兄さんたちに日食グラスを借りて歓声をあげる人、様々でした。

ビーチにはまるで不釣り合いな三脚と望遠レンズで太陽を狙っていた私たちに声をかけてくださる方もいらっしゃって、いろんな日食グラスでの見え味を比べてみたり、沖縄の島をめぐって日に焼けた好奇心旺盛なパパが繰り出す怒涛の質問に答えてみたり、事前にセッティングされた観覧会では遭遇できないような一期一会の出会いも楽しみました。

当たり前のように輝いている太陽が欠けているという非日常、これを目にすることによって多くの人がいろんな感情を抱いたことでしょう。冒頭に書いたように太陽は偉大だと思う人もいれば、逆に頼りないと思う人もいたかもしれません。鳥や虫たちは何か感じるのだろうか、あるいは古代人はどのようにこの日食を見たのだ



沖縄、水納島にて撮影した最大食分0.93の太陽。



部分日食撮影に臨む平松。欠けた太陽でこంగり焼けた足の甲にはサンダルの鼻緒の跡がくっきりと……

ろう、そういったところに思いを馳せるのも面白いでしょう。見るだけでも面白いんだけどもっと深く考えてみるともっと面白いかもしれない、普段の星空や天体写真を見るときにも当てはまるそんな観点を再確認した、今回の日食でした。